インターネットオークション・フリマサイトへの出品、
無断転載、複製複写、Web 媒体への掲載(動画化含む)を禁じます。
発見した場合は、1 文字につき 10 円もしくは 1 ページにつき
5,000 円の掲載料(使用料)をいただきます。

一、

――その日は雲一つない晴天だった。

「本日より第三部隊副隊長を務めます松本山次（まつもとさんじ）です」

どうぞよろしく、と三十名ほどの隊員の前で頭を下げたのは、二十代半ばの若い男だった。小麦色の肌に鳶色の髪、そしてハシバミ色の目が印象的な精悍な顔立ち――健康的な美しさをたたえていた。歓迎の意を表すようにパチパチと拍手が起きる。

「ここに来る前は、第五部隊で【貴賓（きひん）】地区の警備を主に担当していました。慣れないこともあるかと思いますが、よろしくお願いします」

その言葉を受けて隊員たちにざわめきが広がったが、第三部隊の隊長は片手を上げるだけでそれを制した。ずらりと並んでいる隊員たちよりも若く、漆黒の目と髪が人目を引く彼は、特ににこりともせずに口を開いた。本当に整っている顔は、無表情でも美しいのだと松本は思わず感心しながら話を聞く。

「今日からひと月ほど、松本には【住（じゅう）】地区の警備と治安維持について日勤で慣れてもらう。それが終わり次第、わたしの補佐をしてもらうつもりだ。このひと月の間は、隊長補佐たちに少し負担をかけることになるがよろしく頼む」

隊長――六条院真仁（ろくじょういんまひと）は決して大きくない声でそれだけ言うと、松本とバディを組ませる相手の名前を呼ぶ。呼ばれた彼は松本に向けてにこり、と笑って、よろしくと声をかけた。

○

五十年前〈世界を滅ぼす〉大戦後に成立した都市国家〈ヤシヲ〉。小さな都市国家が設置している自警団が〈アンダーライン〉だった。

自警団は国における警察任務を請け負う組織であり、五部隊からなる。そのうち一部隊は【貴賓】地区の警備を担当し、他の四部隊は【住】地区の警備と治安維持を実施している。【住】地区は二十四に分かれ、それぞれに番号が振られているが、番号が大きくなるほど良く言えば自然豊かに、悪く言えば田舎になってゆく。

今回松本は【貴賓】地区の警備を担当していた第五部隊から昇進によって【住】地区の警備・治安維持を担当する第三部隊に所属することになった。松本も二十五歳と若いが、彼の上に立つ隊長も二十七歳と若い。

若い者ばかりで務まるのか、という意見も上がったらしいが、若い者だけだからこそできることもあるだろうという執り成しによって無事に就任が決まったと元上官に告げられたとき、松本はこっそりと安堵の息を吐いた。

「副隊長、びっくりしたでしょう」
櫻井、と名乗った松本のバディは穏やかな笑みを崩さないまま廊下を歩きながら言う。〈アンダーライン〉のメインの仕事は【住】地区の警備巡回であり、第三部隊が担当する地区を三交代制で巡回する。【貴賓】地区にいたときにはなかった仕事に松本の胸は躍る。そもそも【貴賓】地区に治安維持という概念はない。外からの出入りは厳重に管理され、中にいるのも〈アンダーライン〉の中で厳重に管理されたメンバーと貴族の家に勤めている人間だけだった。
「ええ、話には聞いたことがありましたけど、本当に貴族出身の方なんですね」
六条院、という名前を聞けばすぐにわかる。自警団に入るにあたって名前を変えることはしなかったのだろう。名前を聞けばすぐに正体が割れ、様々なことを言われただろうが、彼はそれに屈しない強さと頑固さをそなえている。
「俺たちも最初は戸惑ったけど、段々慣れるし、いい人ですよ。悪いようにはならないと思いますよ」
そう言う櫻井の顔には目立ち始めたしわが見える。
「……そうだと、いいんですけど」
「それにほら、副隊長は第五部隊だったんだから慣れてるでしょう？」
「いや、俺が会ったことあるのはその家に勤めている人くらいで、貴族その人自身に会うことなんてなかったんですよ」
この国における貴族の美貌は有名だった。人の上に立つものは、何かしらひとつ、人を引き付ける要素を持っているということをありありと実感する見た目である。六条院もそのひとりだ、と松本は思った。
「櫻井さんは、」
「呼び捨てでいいですよ」
「いや、これは俺が呼びたいからいいんですよ。ただでさえ年下なんだから、人生の年長者に敬意払うに越したことないでしょう」
気を取り直して松本は口を開く。
「櫻井さんはいつからここにいるんですか」
「前の隊長のころからですね」
「前の隊長も若かったんですか？」
その言葉に櫻井は首を縦に振った。
「第三部隊はずっと若い人が隊長するようになってますね。そういう方針、もありますし、優秀な人材腐らせておくわけにはいきませんし。まあ、だからか比較的気性が穏やかな人間と若い人間が多いのは事実です」
「ああ」
確かに、着任挨拶への反応を見ていただけでも松本を侮ったり、馬鹿にするような反応は感じられなかった。
「なるほど。皆さん、いい人ばかりですね」
「まあ、いい人かどうかはおいておきまして、副隊長がのびのびと働けるのは間違いないですよ」
「それは、ありがたいですね」
しみじみしながら、松本は巡回のための自動車に乗り込んだ。本日の担当地区は商業施設が立ち並ぶ【住】地区七番

街〈イータ〉である。【住】地区は【中枢】地区を中心に同心円状に広がっており、七番街は二層目に位置する。【中枢】地区からの所要時間は自動車で二十分程度だった。

○

「なんだか様変わりした気がします」
【中枢】地区を抜けたところで松本がつぶやいた。
「そうですねえ。十年近く訪れていないと変わったどころの話ではないと思いますよ」
【中枢】地区ならびに番号が若い【住】地区には雲をも突き抜けそうな高層ビルが並ぶ。櫻井が入隊したばかりの頃はこのあたりもまだ開発途中だったという。
「元々〈世界を滅ぼす〉大戦も各国の技術競争が苛烈になりすぎて起きたものですし、技術が残っていたので復興自体は早かったんですけど。人間の生活基盤が整わないとその先には進めませんからね。俺も小さかったんで、大人の話を聞いただけですが、一番早く復刻して現在の形に近かったのは【住】地区六番街〈ゼータ〉だそうですよ。まあ当時はそんな名前もついていなかったでしょうけど」
「なるほど」
櫻井の話に松本は苦笑した。【住】地区六番街〈ゼータ〉は現在も繁華街として栄えており、飲食店はもちろん水商売の店も多い。松本の育ちは【住】地区二十番街〈ウプシロン〉であり、繁華街にはほとんど近寄ることなく現在に至る。
「せっかくなのでどこかで副隊長の歓迎会もしましょうね」
「ありがとうございます。人混みが苦手なので、あんまり騒々しいところは避けてもらえると助かります」
「わかりました」
なるべく要望にかなうところを探しておきます、と櫻井はにっこり笑って言った。
「ところで副隊長、もしかして運転経験は浅い方ですか？」
主要の広い道路でしばらく松本にハンドルを任せていた櫻井だったが、ふと疑問を口にした。その言葉に松本は首を縦に振る。「……すみません、【貴賓】地区では基本徒歩でして」
交通車両との接触や誘拐の可能性を考慮して、【貴賓】地区は基本的に徒歩のみだった。入隊後すぐに【貴賓】地区に配属された松本は運転ができる歳ではなく（それもあって【貴賓】地区に配属されたともいえる）、運転ができる歳になってすぐに免許を取って以降もほとんど運転する機会がなかった。
世の中には自動運転搭載車も溢れているが、安価なのは人間自身で運転する自動車だ。自警団の懐事情は決して温かいとは言えない。
「……次の休みに練習しておきます」
「付き合いましょうか？」
「いえ」
さすがに貴重な休みを使ってもらうわけにはいかないう

え、訓練場を使うことにしているので松本は断った。
「先ほどから気になっていたんですが、そのサングラスは？」
どうしてかけているのか、と訊ねる櫻井に松本は答えを探しつつ指先でテンプルに触れた。
「これですか？　ええと、俺、目の色が薄くてまぶしい光が苦手なんですよね。人相も悪くなるのでできれば使いたくないんですけど、今日みたいに天気のいい日にはかけていないと逆に危なくて」
松本の目は美しいハシバミ色をしている。サングラスは〈アンダーライン〉組織からの支給品だった。
「なるほど、それは大変ですね」
「はい。まあ、この国の一般的な目の色からすると珍しいですしね。昔は多少苦労もしましたが」
あはは、と笑って松本は車を路肩に寄せた。ここから先は路地も多く入り組んだ道になるため、土地勘のある櫻井に任せた方がよいと判断した。周りを行くスーツ姿の人間は〈アンダーライン〉の自動車が停止したために、きょろきょろとあたりを見回していた。事件も起きていないのに不安にさせてしまったか、と思いつつ松本は口を開く。「すみませんが、交代で」
「了解です」
運転席と助手席を交代する。運転手交代によって自動車は滑らかに走り出した。
「そういえば」
運転手交代後に松本が口を開いた。なんですか、と櫻井は答えた。
「隊長こそ第五部隊に配属されそうですけど、ずっと第一から第四部隊にいたんですよね」
「そうらしいですね」
「……第五部隊にうってつけのような気もしますけど」
「俺は逆だと思いますね。多分、隊長は【貴賓】地区を出たかった人なんじゃないかと思うんですよ。まあ、話していて感覚がズレてるなー、って思うところはありますけど」
本人もそれは自覚してて、なにかと訊いてくれますよ、と櫻井は笑った。それを聞いて松本も苦笑する。
「確かに、【貴賓】地区を出たい人に第五部隊はきついですね。あの仕事だけは【貴賓】地区にとどまるしかないですし。というか、その理論だと十年近く【貴賓】地区にいた俺も感覚ズレ起こしてますよ、きっと」
「そうですかね？　副隊長は雰囲気が親しみやすいと思いますよ」
「まあ、生まれも育ちも庶民ですからね」
松本はそう言ってふう、と息を吐いた。――瞬間。
『――本部より〈イータ〉巡回チームへ。東四北二にて流血した男性が倒れているとの通報があった。確認を頼みたい』
自動車の自動通話ツールから六条院の声でアナウンスが入る。
「了解しました。松本、櫻井向かいます」
運転よろしくお願いします、と言って松本は櫻井とともに現場へと向かった。

○

松本と櫻井が到着した現場には頭から流血した男性が倒れており、誰かにガラス板のようなもので殴られたようだった。誰に殴られたのかは不明だが、割れたガラスで頭を切ってもいたため病院へと搬送されていった。男性も意識は失っていたものの脈も呼吸も正常だったため目覚めを待って話を聞く、と松本は救急隊員に告げた。

「まったく、ガラス板で殴るってなんだよ」

報告内容に思わず松本が言葉を漏らすと、櫻井がそうですよね、と相槌を打つ。飛び散ったガラスのかけらを踏まないよう慎重に足を運びながら松本は状況を把握していく。

「……この男の靴なんでこんな靴履いてるんですかね？」

櫻井は見せられた写真の靴を指さす。男は登山ブーツのような厚底で溝が刻まれている靴を履いていた。商業ビルが立ち並ぶ【住】地区七番街〈イータ〉にそのいでたちで来ないとは言い切れないが、登山にでも行くようなやや不自然な格好だった。おまけに靴底の溝にところどころ灰褐色の石のようなものが挟まっている。

「蛍石？」

松本は男の靴底の写真を見ながら言う。ほたるいし、と櫻井はオウム返しに言葉を口にした。

「そう。多分前に見たものと一緒だと思います。病院に連絡して男の靴を回収しましょう。科技研に鑑定してもらって、もし蛍石なら事情を聴かなければなりません」

「？」

「蛍石って、もう〈ヤシヲ〉だとほとんど採れないものです。採れるとしたら密採掘になりますからね」

そこまで言って松本は足元に落ちていた小さな石を拾い上げて、すん、とにおいをかいだ。

「においからなにかわかるんですか？」

「この辺り一帯から妙な湿ったにおいがするんです。発生源がなにかと思って嗅いでみたんですが、こいつですね」

「……なるほど」

副隊長、すごいですね、と言う櫻井に、前の部隊で多岐にわたる分野の教養を仕込まれた、と松本は返した。ある程度の教養がないと【貴賓】地区の警備は務まらない。

「あ、櫻井さん、科技研の担当者ご存知ですか？」

科技研――科学技術研究局は様々な研究を取り扱う研究所だ。〈アンダーライン〉の一部隊につき数人の研究者が担当してつき、依頼があれば鑑定や科学調査を行っている。入局は自警団とは別個に行われており、現役の局長の判断に任されている。【中枢】地区にある国立大学を卒業した者が入局することが多い。

「ああ、それでしたら元岡（もとおか）さんって女性ですよ。機転もきくし、頭もいいひとです」

まあ、うちの場合隊長が隊長なので、それなりの人が相手

をしてくれるんですよね、と櫻井は言った。
「なるほど」
とりあえず連絡しますか、と言って松本は支給された業務用端末を取り出し、六条院へとつながる四桁の番号を叩いた。

○

『――わかった。すぐに元岡に繋ごう。結果はこちらに送ってもらえるように手配するから、一度戻れ』
「了解しました。戻ります」
松本は通話を終了させると、櫻井を振り返った。
「目撃の情報は聞き出しましたし、このあたりの監視カメラは手に入れたので、帰ってから見ましょうか」
「了解です。ところで副隊長、本当に【住】地区の巡回初めてですか？　すごく手慣れてませんか？」
松本の手回しの良さに櫻井は疑問を口にする。
「まあ、一応教育訓練機関にいろはは叩きこまれましたからね。あと【貴賓】地区ではここ以上に監視カメラもありますし、なにか異変が起きたときの調査はもっと早いんですよ」
「なるほど。俺も一回くらい第五部隊行ってみてもいいかもしれません」
「……まあ、話せないことはたくさんできますし、家も【中枢】地区の官舎に限られるので家族がいる方にはおすすめできません」
「……では、やめておきます」
今度娘が結婚するんですよ、と言う櫻井は父の顔をしていた。

第三部隊の本部・執務室に戻ってくると、すでに鉱物の鑑定結果が出ていた。迅速さに感心する。
「すごく早いんですね」
「ものによる。今回は松本が蛍石だろうと検討をつけていたから早かっただけで、何かわからないものを特定するのはかなり骨が折れる」
六条院は表情ひとつ変えずに結果を松本に見せた。端末に届いた鑑定結果を示す画像には、
――蛍石特有ノ発光ヲ確認。ヨッテ、蛍石ト断定スル。
とだけ書かれていた。
「結果は簡易なものになる。詳しい結果がほしければ元岡に連絡するといい」
連絡先はこれだ、と言って六条院は元岡の名刺を出した。元岡佐都子、と書かれた名前の横に電話番号とメールアドレスが書かれている。名刺自体は六条院の持ち物であるため、松本は端末で写真を撮った。
「承知しました。ありがとうございます」
松本が頭を下げる横で、櫻井が口を開いた。
「映像解析室を借りてもよろしいでしょうか？」
「ああ、構わない。松本にも使い方を教えてやってくれ」

もとおかさとこ

「承知しました」
櫻井は目礼すると、松本をいざなって執務室をあとにした。
「映像解析室ってなんですか？」
執務室を出た途端、興味を抑えきれない様子の松本が櫻井に訊ねる。
「呼んで文字の如くですよ。先ほど副隊長が持ち帰られた映像を解析機にかけるんです。基本的にこの国に定住する人間の顔情報は登録されていますから、もし映像に誰かの顔が写っていたらそこから割り出せます」
まあ個人情報と公共利益のはざまで揺れている制度ですけど、こういう時には手っ取り早くて助かります、という櫻井に松本は訊ねる。
「もし顔がマスクや目出し帽なんかで隠れていたらどうするんですか？　あと不法入国している人間も」
「……その時は、人力で頑張るしかないです。もっと技術が進んで、骨格データベースでもできれば目出し帽やマスクでも解析できると思いますが、不法入国には打つ手なしですので」
がんばりましょうね、と微笑む櫻井に松本はひきつった笑みを浮かべることしかできなかった。――松本は端末を含む電子機器の光にも弱い。

○

「休憩！」
解析を始めて一時間後、松本が先に音を上げた。櫻井も椅子に座ったまま、背伸びをする。
「まあ、一時間やりましたし、一度休憩しましょうか。副隊長、サングラス使ってもいいんですよ」
「いや、サングラス使うと色が分からなくなるからだめです。それで見逃したりしたらいやなので」
「ああ、それならサングラスよりも軽いライトカットのメガネをつくってもらいましょうか。ほかの隊員もたまにかけてますよ。それにしても、これだけ光に弱いと日常生活を送るにも苦労しませんか？　大丈夫です？」
純粋に気遣ってくれる櫻井の言葉がありがたく、松本はつるり、と口をすべらせた。
「正直なところ、大丈夫ではないです。さっきは、色素って話をしましたけど、その、本当は違います」
「ああ、違うんじゃないかなと俺も思っていましたよ」
光に弱い目、常人以上の精度を発揮する嗅覚を目の当たりにした櫻井にはなんとなく彼が隠そうとしたことの見当がついていた。
「――普通の人よりも五感が優れているんですね」
「そう言えば聞こえはいいですけど、香水とかも苦手ですし、大きな音も苦手なんです。日常生活を送るにはちょっと不便ですね。せっかくの能力だから大事にしなさいって言われることも多くて、あー、さっきは嘘ついちゃいました。すみま

せん」
「それは……確かに大変そうです。久しぶりの【中枢】地区と【住】地区はかなり刺激が強かったでしょう」
あまり休憩をはさめなくて申し訳ない、と謝罪する櫻井に松本は慌てて首を横に振った。羨ましがられることこそあれ、ねぎらわれることはなかった、と内心で松本は驚いた。自分ではあまりメリットの感じられない能力が活かせるならば、と入隊したが、松本の想定以上に刺激が多く、負担になっていたのは事実だ。入隊当時、松本を比較的刺激の少ない【貴賓】地区へ配属してはどうかと進言し、引き抜いてくれた第五部隊の隊長には頭が上がらない。
「刺激は強かったですけど楽しかったですよ。ご心配ありがとうございます。端末を使った作業にも少しずつ慣れるようにがんばります」
松本が礼を述べて肩を回していると、松本の端末が音を立てた。
「もしもし」
『もしもし――あ、わたくし科技研の元岡と申します。第三部隊、松本副隊長のお電話ですか？』
「はい、そうです。先ほどは迅速に対応していただきありがとうございました」
耳もとで名乗ったのは科技研の元岡だった。聞きやすい声に松本は少しホッとする。六条院に松本へ直接連絡するよう言われたのだ、と前置きをして元岡は話を続ける。
『いえ、松本副隊長が見当をつけていてくださったのでこちらも助かりました。ありがとうございます。先の解析とは別で、靴に着いていたガラス片も解析したのですが、結果必要ですか？』
「助かります。いただける情報はなんでも手掛かりになりますから」
『わかりました。では、松本副隊長の端末にお送りします』
「ありがとうございます。あ、あと」
『はい、なんでしょうか？』
「蛍石、どこで採れたものかわかりますか？　なんとなく、彼から【住】地区十番街〈カッパ〉にあるデミタス鉱山のにおいがした気がするんで、検証できそうでしたらお願いします」
現場で妙な湿ったにおいがした、と松本は思っていた。デミタス鉱山自体は小さいが、昔は銀を産出していたらしく、今は観光地と化している。昔行ったときにかぎ取ったにおいが被害にあった男からもしていた。
『石の採掘場所の検証は進めています。もし密採掘ならば、ほかにもいる人足を摘発してもらう必要がありますので。ただ、デミタス鉱山から蛍石が採れるという情報は聞いたことがありませんが』
「密採掘ならどこでも可能性があると思うんです」
松本の言葉に元岡は一瞬黙りこんだが、わかりました、その線でも検証を進めてみます、と言って電話を切った。
元岡が松本へと送ってきたデータは簡潔でよくまとまっ

ていた。ガラスは簡単に解析ができたらしく、ユウヒガラスで生産されているものだと文字が並んでいた。そもそもガラスは基本的に大きくすることが難しいが、それを技術的に可能にしたのは国内でも有数のガラスメーカーだけだった。他社のガラスからは検出されない特殊成分が含まれているため確定した、と書かれていた。

「いやでもこれだけじゃだめだな……」

ガラスだけならば一般の人間でも買える。もっと核心的な部分に迫らないと誰がどうして殴打したのかは闇の中のままだ。そして松本の胸には一つの疑問が浮き上がる。――そもそも、この事件にガラスメーカーの人間が絡んでいるのか。蛍石は、鉄などの金属の精製への使用が工業的には有名だ。企業の調達費用を抑えたいのか、あるいは。

「松本」

松本がもらったデータを手に考え込んでいると、いつの間にか背後にいた六条院が声をかけた。

「なんでしょうか？」

「病院に運ばれた被害者の男性だが、先ほど意識が戻って明日には話をしてもいいらしい。明日の勤務時に聞き取りに行ってくれ」

「承知しました」

松本は軽く頭を下げると、データに目を移した。

「……フローライト」

ぼそ、とつぶやかれた言葉に松本は顔を上げる。だが、六条院自身は独り言を拾われると思っていなかったらしく、少しだけ驚いた顔をしていた。松本はしまった、と思うものの、一度見せてしまった反応は取り消せない。

「ええ。採掘した場所がわかれば、ヒントになると思ったんですが、元岡さんに俺の考えはあまり肯定的に受け取ってもらえなかったみたいです」

「まあ、そうだろう。〈ヤシヲ〉の地理を知っている人間はまずデミタス鉱山という名をあげたりはしない」

「でも、したんですよね。あの男性から、デミタス鉱山にしみついている銀のにおい」

この国で銀が採れていたのは、そこしかない、と松本は静かに言った。もうとっくに採りつくしてしまい、今は国外からの輸入に頼るしかない状況だった。

「……そんなことまでわかるのか」

「信じがたいですよね」

松本は六条院の言葉に苦笑した。

「いや、信じよう。わたしはそなたのその能力を評価したからここに呼んだ」

「……」

役に立てば、と思って入隊を決めたが本当にこの能力を評価して使おうと思ってくれる人がいたとは思わなかった。

――大丈夫、いつかその能力を評価してくれる人が現れるよ。

そう言って松本の頭を撫でてくれた人がいる。そんな昔の

記憶に松本はそっと蓋をした。
「松本？」
「いえ、ありがとうございます。まさか隊長ご自身が俺を呼んでくれたとは思ってもいなかったので驚きましたが」
てっきり南方（みなかた）隊長の推薦だと、と松本が続けると六条院は首を横に振った。南方は松本の元上官だった。
「南方隊長はもちろんだが、わたしも推した」
「それは、光栄です」
「そうかしこまらずともよい。とはいっても難しいだろうが」
この話し方は直せなかった、と六条院は少し悔しそうに言った。
――この人、もしかしてものすごく人間らしいのかもしれない。
松本は人形みたいに整った顔立ちをしており、近づきづらいと感じた六条院への第一印象を書き換えた。
「それはともかく、わたしからも元岡に進言しておこう。松本の考えも信じてやってくれと」
「助かります」
「部下を援護するのがわたしの仕事だからな。ひと月後からは、そなたも同じ仕事だ」
「はい」
なるほど、今から手本を示してくれるというわけか、と納得して松本はデータに視線を戻す。それならばこのひと月は松本が思うようにのびのびと過ごそう、と決めた。
「ああ、言いそびれたが」
「はい？」
「無茶をすればよい、というものではない。きちんと休養もとるように」
ただでさえ感覚が鋭いのだから、環境になれるまでは無理をするな、と言って六条院は松本に背を向けた。
「……なるほど、なあ」
悪いようにはならないと思う、と言った櫻井の顔が松本の脳裏に浮かんで消えた。

○

「あ！」
「ん？」
監視カメラの解析を進めることさらに数時間、櫻井が声を上げた。副隊長、と呼ばれたので松本は櫻井の横にキャスター付きの椅子ごと動いた。
「こいつじゃないですかね？」
櫻井が指さした先には、ちょうどガラス板が被害者の頭上に構えられた瞬間があった。残念ながら帽子を目深にかぶっている挙句にマスクをつけており、目元も髪で見えなかった。
「写ってますけど、これじゃわからないですね」
付近の防犯カメラの映像を片っ端から見ていき、かろうじて顔がカメラを見ている瞬間がようやく見つかったが、わ

かったことと言えば加害者も男で小柄だがかなりの腕力がありそうな体型をしていることくらいだった。
「振出しに戻る、か」
椅子の背にもたれながら松本はうめいた。
「明日被害者に話も聞けますし、振出しまで戻ってないですよ」
「それ待つしかないかー……。よし、今日は申し送りして上がりましょう」
ふう、と松本は小さく息を吐く。一部隊の勤務体系は四班三交代制である。日勤、夕勤、夜勤の時間帯に区分され、五日働いたのち二日の休日を取ることになる。一般的な企業ではもう少し休日日数も多いが、〈アンダーライン〉は人員に余裕がないこともあいまって、中々これ以上の改善は見込めそうになかった。
「そういえば、副隊長、お住まいは？」
「え？ 今寮に空きがないって言われたから隊舎の一角をお借りしてます」
「なんで？」
思わず敬語も忘れた櫻井が松本に訊ねる。
「なんで、と言われましても」
「あ、副隊長への疑問ではなく、もっと上への疑問です。普通副隊長以上は独身であっても、寮ではなく家を借りる権利があるんですが、それはご存知ですか？」
「ええ。でも、今回特に案内も来なかったので、まあそういうものかと」
寮に入るのは基本的に隊員である。隊長、副隊長といった幹部が住むと業務外にも気を遣うことになるため、入寮するものはほとんどいない。
「……違います。それは絶対に手違いです。第五部隊は何かと特殊ですから、ちゃんと案内するように言っておいたんですが……。こちらの落ち度です、すみません」
頭を下げる櫻井に松本は慌てて手を振る。
「こちらこそ、確認せずにすみません。とりあえずしばらくは隊舎暮らしで全然構いませんので」
「副隊長が構わなくても他の隊員が構いますのでだめです」
うんうんと櫻井は唸っていたが、妙案は思いつけなかったようで「隊長に相談しましょう」と言って松本の手を引いた。

○

執務室に戻った二人が松本の住まいについて六条院に相談すると、六条院は沈痛な面持ちでこめかみを指で押さえた。
「……松本、次に同じようなことがあればまず誰かに確認をとれ。ここは第五部隊とは違うことがたくさんある」
寮を断られたのも当然だ、と六条院は松本に言う。寮の空きはあるが、隊長、副隊長が申請を出した場合はまず「満室です」と言って断られてしまう。
「はい……すみませんでした」

「とはいえ、松本が使っているスペースは緊急時に隊長、副隊長が仮眠をとる場所ゆえ使用自体に問題はない。そこ以外に荷物を置いている場所があり、使用料がかかるならば経費処理に回すように。経費で落とすことはわたしが許可する」
六条院はそこで一度言葉を切り、松本を見た。
「今置いている荷物以外はありません。向こうで使っていたものはほとんどが貸与品でしたので返却しています」
「承知した。では次。仮眠スペースの使用期間はひと月とする。ひと月の間にきちんと家探しをして、自宅を設けろ。そなた、昼間にわたしが言ったことを忘れたわけではないだろうな？」
――環境になれるまでは無茶をするな、きちんと休養をとれ。
この言葉はもちろん、安心して休養をとれる場所があることを前提に言ったが、まさかその場所すら用意していなかったとは、と六条院は内心で呆れる。
「どこでも休めるのも〈アンダーライン〉隊員の適正に含まれるが、一番のセーフハウスはもっておくべきだ」
「……はい」
「それと、隊舎で私生活も過ごすのは、公私が曖昧になるゆえ推奨されない」
「はい」
滔々と語られる言葉は正しいことばかりで、松本は「はい」と返す以外になく。まるで返事のピッチングマシーンになったようだ、と思いながら真面目に聞いていると、六条院はため息をついた。
「なお、斡旋物件もある。明日総務に問い合わせてみるといい」
「……何から何まですみません」
松本は六条院に深々と頭を下げた。六条院は、申し送りを済ませて上がれ、と声をかけて自身も席を立った。
「お疲れ様でした」
松本と櫻井が挨拶をすると、六条院はふたりを振り返り「そなたたちもよく休め」と柔らかな声でもってねぎらった。
ぱたん、と部屋の扉が閉まる。
「……優しい人、なんですね」
「ええ」
そうなんですよ、と言う櫻井の声も同じように優しい響きをしていた。

○

翌日、松本は総務からの斡旋物件の情報と、元岡からの情報を一緒に見る羽目になった。
「……忙しい」
「そりゃそうですね」
独り言を櫻井に拾われる。通常であれば部隊が変わる際に済ませておくはずの住居の移動が住んでいないのだから道

理である。
「昨日聞きそびれましたけど、今総務に出してる住所はどこなんですか？」
「……俺が、ここに入るまで世話になってた人の家ですね。もちろん【住】地区ですけど」
「それで通す総務には俺からきっちり苦情を言っておきます」
ベテランの櫻井は苦い顔で言った。〈アンダーライン〉の隊員は【中枢】地区に住まうのが義務だ。入りたての隊員は実家の住所を書いているが、これは配属が決まるまでの暫定措置である。
「いくら副隊長がお若いからってこれはさすがにないです。ナシ！」
「……ありがとうございます」
本気で怒っているらしい櫻井に松本は礼を言う。
「とはいえ、だからといって勝手に隊舎に住むのもないです」
「それは、申し訳ありませんでした」
隊舎には仮眠室もあり、大浴場もあり（汚れた現場に行ったあとに使用する隊員が多い）、ランドリースペースも食堂もある。衣食住のすべてが賄える隊舎は住居としてかなり魅力的だと松本は本気で思っているが、これを口にした瞬間櫻井と六条院に怒られることは明白だったため、口をつぐんでいた。
「あ、元岡さんから追加の情報来ましたよ。分析、終わったそうです」
櫻井が端末を見ながら声をかける。
「――副隊長の考え通り、デミタス鉱山で間違いないそうです」
被害者の靴はまだ科技研にある。石以外の土の成分から他と比べて特徴的に多い銀が検出されたとのことだった。
「……俺もまさかと思いましたけど、あっててよかったです。あと、もう一つ気になっていることがあって」
「なんでしょう？」
「あの現場のガラスってカモフラージュの可能性、ないですか？　そもそも蛍石って鉄やアルミなんかを製造するときに加えられているものでしょう。あまり目立たない役割ですが、工業的にはこちらでの使用量が圧倒的に多いと思います。特に鉄は、すべての産業において使われますから」
「鉄鋼業界を疑う必要があるということですか？」
櫻井の問いかけに松本は首を縦に振った。
「密採掘をするメリットがあるのはおそらくそちらだと思います」
松本は元岡のデータの最後に書き加えられている言葉を櫻井に見せる。
――近年は人工のホタルイシ合成も進んでおり、ガラス製造においては人工ホタルイシが使用されることが増えているため、密採掘のメリットは大きくないと推測される。
「いずれにせよ、被害者に話を聞かないとわかりませんね」
「……素直に話してくれればいいですが」
「しばらく〈アンダーライン〉で匿ってもいいでしょうし、

そのあたりの交渉は俺がしますので、副隊長は援護射撃を頼みます」
「了解」
面会の時間まではあと三十分。そろそろ準備をするか、と言って松本は腰を上げた。

○

松本と櫻井が案内された病室は真っ白かと思いきやパステルカラーで彩られており、病院のイメージを覆す内装だった。ガラスで切った傷と、脳震盪を起こしていたことから一晩強制的に入院させられた、と不貞腐れたように話す被害者に松本は苦笑した。搬送されたときは気が付かなかったが、よく見るとまだ少年といっても差し支えない顔立ちの被害者は自らをシュウ、と名乗った。どうやら若い見た目の松本に心を開いてくれそうだ、と判断した櫻井は松本の後ろに控えることにした。
「……住んでいる場所も教えてくれるか？」
松本が訊ねるとシュウは知らない、と首を横に振った。
「おれたちが住んでいたのは、窓のない建物だったから、知らない。住所なんてきかれたこともないし、教えられたこともない」
「……そうか」
おれたち、と言ったのを松本は聞き逃さなかった。確実にシュウ以外にも同じような環境に捕らわれている人間がいる。
「年齢は？」
「……それも、わからない。多分、十七くらいって」
「誰かに言われた？」
松本の問いかけにシュウは首を縦に振った。しかし、その誰かの名前は迂闊に口にできないものなのか、ぎゅっと唇をかみしめていた。
「言えないことは、言わなくていい。でも俺はシュウに話を聞くのが仕事だから質問は続ける」
「……うん」
「シュウは、なんで昨日あの場所にいたの？」
シュウはしばらくぎゅっと唇を引き結んだまま黙っていたが、ちらり、と松本を見た。
「……おれの話、言わないでくれる？」
「ああ」
〝誰に〟という目的語が抜けていたが、松本は違うことなく理解した。言わないよ、と約束をしてシュウに続きをうながすとようやくシュウは重たい口を開いた。
「おれ、家族も頼れる人もいなくて、ずっと〈カイ〉にいた。〈カイ〉にまともな仕事なんてないし、そもそも汚い人間ばっかりだったんだけど、ある時、そいつが来たんだ」
【住】地区二十一番街〈ファイ〉以降の【住】地区は治安が良くない。〈アンダーライン〉では四部隊が六地区ずつ担

当して治安維持にあたっているが、呼び出しは圧倒的に二十一～二十四番街での事件が多い。おそらくこの少年は【住】地区二十二番街〈カイ〉で生まれ育ったのだろう、と検討をつけて松本は話の続きを促した。

「そいつは、若い人間を探して仕事を与えているって言ってた。おれ、スーツなんて着てる人、初めて見たから、」

――信用してついて行ってしまったのだとシュウは言った。

だが、シュウが連れて行かれた先は新たな地獄だ。目隠しをされてトラックに乗せられ、日中は暗い鉱山の中で働き、また目隠しをしてトラックで帰り、夜は窓のない家で眠る。そんな生活をしていれば遅かれ早かれ人間の神経は狂う。かろうじて給金は出ていたというが、それを使う暇もない。

――こんな生活を続けるくらいなら、いっそ死ぬことを覚悟で抜け出そう。

そんな決意をしたシュウがそこを抜け出すまでにはあまり時間がかからなかった。

「採れたものを運ぶための地下道があったから、それをたどって出た先があそこだった」

つまり偶然〈イータ〉に出てきたのだと言うシュウに、なるほど、と松本は相槌を打った。どうりであの場所にそぐわない格好をしていたわけだ。

「ところで、これは君の靴？」

シュウの話がひと段落したのを見計らって櫻井がシュウの靴の写真を見せながら訊ねる。科技研の報告ではシュウの靴にはＧＰＳ端末が巧妙に仕組まれていた。おそらく脱走をしても位置を把握するためだろうが、地下道を通ったおかげで地上に出るまで、位置が割れなかったのだろうと推定される。

「うん」

うなずくシュウに松本は思わずため息をつく。ものを知らない少年たちをさらい、勝手に働かせて管理をする――なんて卑怯で姑息な手段だろうか、と憤りを抱きかけ――慌てて鎮火させた。

「シュウ」

「……？」

「シュウがこれまでにやってきたことは資源の密採掘――簡単に言ってしまえば犯罪だ」

やはりか、という顔をするシュウに松本はそんな顔をするな、と笑った。

「だけど、何も知らない少年をただ同然で働かせて、勝手なことをしたその大人はもっと悪い。必ず俺たちが捕まえるから、シュウに協力をしてほしい」

「協力？」

「退院したあと行く先あるか？　なければしばらく俺と住むってことでどうだ？」

「松本副隊長！」

櫻井の声が叱責の色を帯びる。家も決まっていない人間がなにを言うのか、という響きに、松本はいいだろう、と言った。

「あなた隊舎に住んでいるのにそこに住まわせてどうするんですか！」
「いや、年もいいころだし見学でもなんでも言えばいいじゃないですか」
「機密事項もたくさんあるんですよ……」
引き下がらない櫻井に、松本はよし、と言って端末を取り出す。
「俺の決定で不服ならば隊長の力を借りましょう」
隊長が許可を出せばいいだろう、と言って松本は六条院へと電話をする。そういう問題ではないが、櫻井に松本を引き留めることはできなかった。
数分して戻ってきた松本は晴れやかな顔をしていた。電話の向こうの六条院の苦労がしのばれる、と櫻井はこめかみを押さえた。
「隊長から許可が出た。明日俺がまた迎えにくるから、しばらく一緒に暮らそう」
「……いいの？」
「まあ、もてなしてはやれないし、この事件が解決したあとまでは面倒見てやれないが」
松本の言葉にシュウは少し考えて「ありがとう」と礼を言った。松本は傷の付近を避けてシュウの頭をくしゃくしゃと撫でた。
「まったく、何考えているんですか」
「……申し訳ない。でも、こうするしかないと思ったんです。このまま放置したらあの子の命に危険が及ぶし、一番よくて元の場所に戻るだけですから」
「隊舎には機密も多いんですが」
「それは、おそらく大丈夫です。あの子は字が読めないと思いますから」
【住】地区二十二番街〈カイ〉地区の人間の識字率はおよそ四割。だがそれは元々別の地区に住んでいた人間の識字率であることがほとんどだ。
「だから、俺たちが話すことに気をつけてさえいれば、大丈夫です」
「何かあった時にあなたの首だけじゃ済まなくなっちゃいますよ」
櫻井の声は純粋に心配の色を帯びており、松本は罪悪感を抱く。
「そうですね。……でも、俺は俺の手が届く範囲で出会ってしまったあの子どもを見捨てることはできません。俺も、似たような境遇で救ってもらえたから、俺じゃない誰かにその恩を返すことが、俺にできる唯一なんです」
やっとできる地位になった、と言う松本に櫻井は一言だけ、
「……わかりました」
と返した。

○

松本は約束した通り、シュウを隊舎に迎え入れて一緒に過ごすようになった。昼間はシュウを使っていた人間を洗い出すため、鉄鋼系メーカーの社員とガラスメーカーの社員の写真(鉄鋼系メーカーが本命だが念のためガラスメーカーも入れられているせいで膨大な量になっていた。これらは櫻井が映像解析室のデータベースから引っ張ってきたものだ)を端から端まですべて見せている。長い間地下と暗い空間で過ごしてきたシュウの集中力は長く続かない。三十分もすれば、明るさに耐えられなくなって休憩、という調子であるため、中々確認作業は進まなかった。

「……ごめん」

「何が？」

冷やしたタオルを目の上に乗せられながらシュウは小さな声で謝罪をした。松本はその謝罪にいつもの調子で返事をする。

「時間、かかってて、困ってるだろ」

「いや。ほかの事件に比べたらスムーズで助かるよ。もっと手がかりが少ない事件なんてたくさんある。おまけに俺も光には弱いから休憩をもらえて助かってる」

「……」

松本の言葉にシュウは何も言い返さなかった。

「松本、さん」

「別に呼び捨てでもいいよ」

松本がそう言うと、シュウは慌てて首を横に振った。

「よくない！　だって、松本さんえらい人なんでしょ？」

「階級上は、な」

少し年が離れた兄貴みたいな感じで接してくれていいのに、と松本は思いながらシュウの頭を撫でる。

「本当にいいんだよ。俺の部下ならまだしも、そんな気は遣わなくていい」

「……でも、おれを助けてくれた人を呼び捨てにするのは、よくないと思うから」

シュウの答えに松本は少し驚いたが、なるほど、と独り言ちる。素直なこの少年にどうか未来の光があってほしい、と思いながら松本はシュウの頭を撫で続けた。

「休憩、もう少しいるか？」

「ん、大丈夫。おれ、がんばれるよ」

シュウはちらり、とタオルの下から目をのぞかせた。

そこから幾度かの休憩をはさみながら写真を見ていると不意にシュウが「あ、」と声を上げた。

「これ……こいつだ、おれに声かけてきたのは。あとこの写真の横のやつになぐられた！」

興奮したように写真を指さすシュウに松本は慌てて訊ねる。

「間違いないか？」

「おれに声をかけてきたときは、もう少し年食ってた気がするけど、そう。こいつだ」

シュウが反応したのは小さな鉄鋼系メーカーの人間だっ

た。平尾優紀――所属は調達部と書かれており、松本の中で一本の糸がつながる。推測通り、調達先もしくはコストに困って、自家調達を考えたのだろう。おそらくもっと大きなメーカーであれば自家調達は選ばない。生産量が桁違いだからだ。

「ありがとう。シュウのおかげで俺たちも動ける」

「……そうなの？」

「あとは、お前の仲間たちが働いているところをおさえれば解決だ」

それは俺たちじゃなくて別の部隊がやるけど、と言って松本はシュウの前に表示していた写真にチェックをつける。

「そうなの？」

「ああ、あくまで俺たちの仕事は警備と治安維持だからな。こういうところで調査や証拠集めをするのは、別部隊だ」

長期で対応する必要のある案件は、自警団と並列で運営されている別組織〈ミドルライン〉が担当する。なお〈トップライン〉も存在するが、そちらは【中枢】地区の要人警護――つまるところSP業務が主だ。〈アンダーライン〉が担当するのは大体一週間程度で済むような事件が多い。文字通り、都市国家〈ヤシヲ〉の〝下線〟部分を支える組織だ。

「……じゃあもう、松本さんとはお別れ？」

「はは、なんだ、寂しくなったか？」

シュウに松本が問いかけるとシュウは首を縦に振った。ああそうなのか、と松本は思わずシュウの頭を撫でる。

「ずいぶん俺に懐いてくれたなあ。大したことしてねえのに」

「だって、」

まともに世話を焼いて話をしてくれた人間なんてこれまでにいなかったんだ。

そう言ったシュウはぎゅう、と拳をにぎりしめた。

「ねえ、松本さん」

「ん？」

「今から、おれみたいな人間でも、どうしようもない人間でも、やり直せるかな」

今度はちゃんと、いろいろ知って、騙されずに堂々と働きたい、と言うシュウに松本は二枚の名刺とA4サイズの紙を手渡した。

「？ おれ、よめないよ？」

「お前みたいに、教育を受ける機会を逃した人間を受け入れる機関の名刺と俺の名刺。保護厚生施設を兼ねてるから、ここからやり直せ」

本来ならば司法の裁きを受ける必要があるだろうが、無知な彼らから労働力を搾取した方が圧倒的に悪だ。被害者でもあり、犯人逮捕への協力をしたシュウには、懲罰を受けるより、早くやり直しの機会をやりたいという松本のエゴもある。明日にも、〈アンダーライン〉と懇意にしている司法関係者と書類を作れば、シュウの行き先は決まるだろう。そして、ガラスで殴られた分の治療費と慰謝料が彼の元に行くはずだ。

「この、紙は？」

シュウはぺらり、と紙をつまみ上げた。

「お前の顔から照合をかけたら、きちんと戸籍があったから取り寄せておいた。東風周（はるかぜしゅう）だってよ。いい名前じゃねえか」
「これ、おれの名前なの」
シュウは紙に書かれた自分の名前を物珍しそうにまじまじと見つめた。
「ありがとう、大事に持ってる」
「ん？ あ、待て待てその書類は施設に入るときに必要だから、お前の手元には置けないんだ。今書いてやるから待ってろ」
松本はそう言って、手元のメモ用紙にシュウの名前を書きつける。松本の字は角ばっているが、丁寧に書かれたそれをシュウは嬉しそうに受け取った。
「……もっときれいな字がよければ隊長に書いてもらうけど」
教養レベルと日常の所作の優雅さや文字もきれいさは六条院の方が圧倒的に上だ。だが、シュウは首を横に振った。
「ううん。おれ、松本さんに書いてもらったものがいい」
「それなら、いいけど」
ちょっと恥ずかしいな、と言いながら松本は照れたように笑った。そして椅子から立ちあがってぐっと背伸びをする。
「よし、隊舎に戻って飯食うか」
「うん」
時計を見ると午後六時。松本の定時からは一時間ほどすぎていたが、不思議とあまり疲れは感じていなかった。

○

「ねえ、松本さん」
「ん？」
隊舎で二人が過ごす最後の夜だった。ここ数日は仮眠室に二枚の布団を敷いていた。布団にもぐりこんだあと、シュウが声を潜めて話しかけてきた。
「松本さんは、なんで、ここに入ろうと思ったの？」
「……興味ある？」
「うん。まともに働いてる大人を知ったの、初めてだから」
「はは、そっか」
松本は笑って、シュウの方を向いた。シュウは暗がりに目が慣れるのが早い。暗闇の中でも、松本のハシバミ色の目は美しく輝いていると思った。
「端的に言えば、ここしかなかったから。ここでやりたいこともあったし」
「やりたいことって？」
「それは秘密。あと、俺の体質の話したよな」
「うん」
大きな音、強いニオイと光に弱い。人よりも見えすぎる、聞こえすぎる、わかりすぎる――そんな体質だから、ずいぶんと苦労をした。
「でも、俺を養ってくれた人は、それを活かせる場所があ

るって言った」
「やし……？」
「ああ。世話をしてくれた人」
松本が言い直すと、シュウは理解したようだった。
「それで養成機関を出たあと、ここに入って十年近く働いた。きついこともあったし、どうしようもないこともたくさんあった。でも、今は俺の能力を買ってくれた人がここにいて、お前の人生の手助けもできてる」
結果、適職だったのかもな、と松本はつぶやいた。
「テキショク？」
「あー、ふさわしい職業。俺にあってたってこと」
働いてみないとわからないこともあるからな、と松本は言う。
「あの、おれも、」
「おれも？」
「おれも、ちゃんとやり直せたら、ここ、入れるかな」
そう訊ねたシュウは今までで一番不安そうな声をしていた。前科がつくことの心配をしているのか、と松本は勘づき、布団から腕を出してシュウの身体を布団の上からポンポンと軽くたたいた。
「きっと、入れるさ。お前は、きっと、弱いものの味方になれる」
「……そうかな」
「今、お前がやりたいと思ったことを、やれるようにしっかりがんばってこい。なるべく、俺もここで待ってる」
「なるべく？」
「安全な仕事じゃないからな」
できない約束はしないんだ、と言った松本に、シュウは言葉を詰まらせる。
「うん、わかった。それでも、おれはがんばってみる。いつか、松本さんと働けたら、いいな」
「ああ」
たった数日、一緒に過ごしただけなのに、こんなにいいものをもらっていいのだろうか。
そう思いながら松本はシュウに「ありがとう」と告げた。意味がわかっていないだろうシュウに、今は分からなくていいんだと付け加えて、今度こそ目をつむる。
「おやすみなさい」
「ああ、おやすみ」

○

翌日、シュウは司法関係者と書類を作成して〈アンダーライン〉の隊舎を立ち去った。深々と頭を下げていった彼に、松本は「がんばれよ」と一言だけ声をかけた。
松本の仕事としては、〈ミドルライン〉への引継ぎ資料の作成が終われば終了となる。警邏の合間にぽつぽつと資料をまとめていると、隊長会議から戻ってきたのだろう六条院の

足音が聞こえて顔を上げる。まだ遠くのそれに、出迎えには早いなと判断して、少しだけ待ってから第三部隊隊舎の扉を開けた。少し驚いたような顔の六条院が松本を見つめた。切れ長の目がパチパチと瞬く。
「おかえりなさい」
「いい耳だな」
笑みを含んで言った六条院を隊舎の中に入れ、松本は「ありがとうございました」と声をかけた。六条院が不思議そうな顔をしたので、松本は慌てて言葉を足した。
「あの、あいつ、シュウを隊舎で保護してやれて、よかったです」
おかげできちんと保護厚生施設まで紹介してやることができた上、いつか一緒に働けたら嬉しいという最上級の言葉までもらっている。あのまま、元の労働生活に戻ったり、口封じに命を奪われたりすることがなくて本当に良かった。
「ああ」
なんだそんなことか、と言わんばかりの六条院に、松本は訊ねる。
「あの時、どうして許可してくれたんですか？」
「初めに言ったぞ。部下を援護するのがわたしの仕事だと」
「それは、そうなんですけど」
松本自身もかなり無理を通した自覚はある。
「通常であれば、隊舎に一般人をいれることはない。今回はかなり稀なケースであることは頭に入れておけ。今後はそなたの権限で、証人や被害者の保護ができるが、その場合は別に設けられた施設になる」
「はい」
「今後同じようなことがあったとしても、絶対に自宅には連れて帰るな。……そのあたりの判断ができていたからこその今回の隊舎という選択だとは思うが」
それが保護した人間にとって不利に働くことになる、と六条院は言った。ただ、今回は、保護施設に入れるよりも隊舎で多くの人間に触れあわせた方がいいという判断があったため、特例で隊舎に入れることができた。
隊舎で数日を過ごしたシュウに周りの大人は至極普通に接した。戸惑いつつも、楽しそうに過ごしていた彼の姿を遠くから六条院は見ていた。おそらく自らの出自を気にして直接は声をかけなかったのだろう、と松本は気づいていた。六条院自身にそのつもりがなくとも、相手が委縮する様を松本はこの一週間で何度も見ていた。
「それで、隊長。肝心の俺の質問に答えてもらってないですが」
「……ごまかされてはくれぬか？」
「命令でしたら、従います」
ずるい言い方をした自覚はあった。だが、六条院は松本の言葉に気を悪くした素ぶりも見せず、肩をすくめただけだった。
「わたしの個人的な感傷だ。わたしも狭い世界しか知らず、漠然とそこで生きて死にゆくのだと思っていた」
六条院はここで一度言葉を切ると松本を見て柔らかく笑

んだ。見とれるほどのそれに、松本は思わず目を見開く。この人は、こんなにも柔らかい表情をするのか、と思っていると再び六条院は口を開いた。

「ここも決して広くはない世界だが、それでも闇の中にいた子どもに明るい世界を見せたいと、そなたの話を聞いてわたしもそう思った」

「……」

松本の脳内で初日に櫻井と交わした言葉がよみがえった。

――あの人は、【貴賓】地区を出たかった人なんじゃないかと思うんですよ。図らずも今、その言葉が真実だと肯定されてしまった形になる。

「松本」

六条院は、松本の手を取った。見た目に反してその手はひどく熱かった。この人の熱をしっかりと覚えておこう、と松本は思う。

「これからも、よろしく頼む」

「はい」

「そなたに救われる人間が、きっとたくさんいるはずだ」

――わたしでは、救ってやれなくとも、きっと。

祈るようにかけられた言葉に松本はただ一言、「俺にできる範囲で、尽力します」と返すことしかできなかった。

○

シュウを見送った日から二週間後、松本の耳に無事、密採掘をしていた少年たちが保護されたというニュースが届いた。彼らもシュウと同じように、司法による罰はなく、保護厚生施設で再起をはかることになる、と追加の情報を聞いて、松本はほっと息を吐いた。

残る松本の慣らし期間は一週間。最後まで残ってしまった仕事は新しい家探しだった。

「副隊長、家まだ決まらないんですか？」

顔を合わせるたびに櫻井には叱咤を含んだ声で訊かれるが、斡旋物件はすべて松本ひとりが暮らすには広すぎる。元々、幹部になるような年齢の人間には家族がいることが多いため、ファミリータイプの物件が斡旋のメインになっているのが原因だ。

「俺には広すぎるんですよね。もっとこう、こじんまりしてるところがいいんですけど。それこそ仮眠室に住みたいです」

だめもとでわがままを言ってみるが、間髪入れずに、

「だめです」

と櫻井は松本を叱った。そして一枚の紙を渡す。

「なんですか、これ」

「単身者向けの斡旋住宅です。ただし、単身者向けですから、隊長と同じ集合住宅の一室です。それでもよければ」

「……なるほど」

集合住宅のため、ある程度の部屋数があるようだった。上下左右であれば気まずい思いをするかもしれないが、そうで

なければ悪くない提案だった。
「――フラグ立ってたりして」
「はい？」
「あ、いえ、こっちの話です。すごく助かるので、ここに決めます」
「そうですか！　それはよかった」
　櫻井は申込書も一緒に持ってきていたようで（さすがだと松本は感心した）、さらさらと松本は所属、氏名、年齢を記載した。印鑑はかなりの場所で使用されなくなったが、住居契約などには未だに使用されるので、松本は机の奥から印鑑を引っ張り出して捺印する。
「はーこれでようやく櫻井さんからつつかれる生活ともおさらばですね」
「俺もようやく肩の荷が下りました。おまけに隊長のお隣に人をいれられない問題も解決しましたし」
　櫻井の言葉に松本は一瞬、動きを止める。
「は？」
「いや、総務から頼まれていたんですよ。一応ここの隊長ですけど、一般人とは言いきれませんし、素性の知れない人間は隣に入れられなかったんです」
　こんなにすぐにフラグが回収されるとは思ってもみなかった。妙に手際がよいと思ったら、そういうことだったか、はめられた、と松本が悔やんでいる間にも、櫻井は上機嫌で紙を回収してファイルに挟み込んだ。
「入居は金曜日から可能だそうですので、どうぞ金曜日の夜から移ってくださいね。ロックは共用玄関と自室の二か所で、どちらも虹彩登録で入れます。詳しくは冊子に書いていますので読んでくださいね」
　はい、どうぞと言って櫻井は松本に『入居のしおり』と書かれた冊子を渡した。
「用意周到が過ぎませんか」
「準備万端と言ってください」
　新居決定おめでとうございます、とにこやかな笑顔で宣言され、松本は冊子を渋々受け取った。
「隊長がお隣だと何か不都合があるんですか？」
　真顔で訊ねた櫻井に松本は首を横に振る。
「ないですけど、ちょっと気まずいじゃないですか」
「それはここ三週間の隊員たちも同じです」
「隊員たちは一か月の我慢ですけど、俺はこれからしばらくですよ！」
「いいじゃないですか、帰宅時間ずらしたら。これ以外に斡旋できる部屋ないですし、探す時間とれるんですか？」
　櫻井の言葉に松本は「無理です」と答えるほかなかった。櫻井は満足そうに息を吐くと「では俺はこれを総務に出してきますので」と言い残して部屋を去っていった。
「……まあ、いいか」
　最終的に慣れるしかないのだ、と自分に言い聞かせて松本は手元の冊子を見つめた。
　とりあえず、仮眠室に置いている荷物を片付けておこうと、ため息をつきながら松本は立ちあがった。

アンダーライン　試読Ver.

QRコードより他のお話も読めます

発行　夜明け前に / 朝香トオル（@nvl_THR）
連絡先　nvl.tohru@gmail.com
イラスト　たちばな灘（@t_nada_work）
印刷　コピー